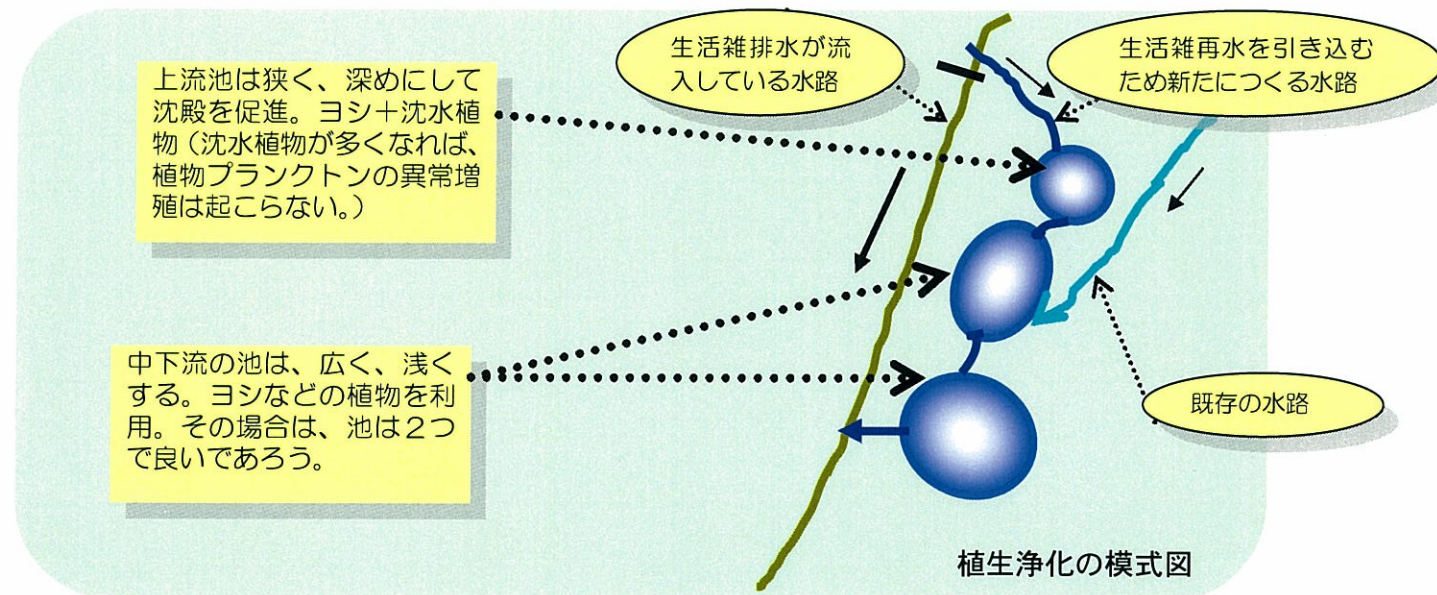


## Ⅸ. 浄化池の今後の課題等

## 1. 浄化池の今後の課題等

計画地は、自然環境の保全を目的にしているため、浄化機能の導入についても、大きな地形の改変や機械設備は適切ではないと考えられ、現況の自然への負荷が小さく、自然と人間の共生が図られる手法が望まれる。

このことから浄化は自然に力を借りた方法が適切であり、ビオトープ、湿地を利用した植生浄化が良いと考えられる。ただし、自然的浄化法のため可能なかぎりの浄化となる。植生浄化のイメージを以下に示す。



## ●今後の課題

- 1日の負荷変動と水量の把握。
- 可能ならば、年間の変動を把握していく。
- 既存の水路形状の把握。
- 市民の意見を取り入れ、下流部の保全・活用内容を決定し、目標とする水質の基準の設定が必要。
- 冬季に植物が育たないため、冬季に生育する植物の導入の検討が必要。

## ●水質浄化池のポイント

- 植物；ヨシ、マコモなどの水生植物、ハスなどを利用。極力、在来種で対応する。
- 水路から水を引き込むために、堰をもうける。また、維持管理に配慮し単純な構造とするため丸太、石等を利用して、なるべく機械的なものを避ける。
- 上流側に小さめのビオトープをいくつかもうけ、土砂や枝・枯葉で埋まった場合は、再生する。また、臭気がするようになったら、泥除去が必要。
- 浄化位置は、上流部で平地のあるところ。一カ所だけでなくても良い。
- 標高が高い水路から、低い水路へ向けて水を流す。ただし、一方通行では片方の水路の水がなくなるため、水量の関係を考える必要がある。
- 二つの谷の水路合流部であるため、沈殿後に希釈するように水路のルートコントロールが必要。
- 浄化後の水を下流の湿地の乾燥防止に利用することが必要。